
魔法転校生...いろいろ！

いよしみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法転校生…いろいろ！

【Nコード】

N1763C

【作者名】

いよしみ

【あらすじ】

学園長こと近右衛門の頼みで転校した男の子達……というには少しいかつい子達がネギま！の物語に沿って話を進めていく物語

プロローグ（前書き）

友達がネギま！の小説書いてみてと、いうので書いたのですが、ネギまについて知識薄なので問題点がありましたら、ご指摘ください。お願いします。

ブローグ

「ふむ、困ったもんじゃのう」

学園長室で近右衛門このえもんは見事なまでに長い、顎鬚をさすりながら唸っていた。その理由は二つある。ひとつは、生徒数三万人以上の巨大学園都市・麻帆良学園のなかでもひととき目立つクラス……女子中等部の2年A組の担任、ネギ・スプリングフィールドにあった。近右衛門から見てもネギは一生懸命なことがわかる。しかし、いくら優秀だといってもまだまだ未熟、本国にはネギとたいして年も違わないのに、近右衛門クラスの達人すらいるくらいだ。なのでネギには年の近いライバルが必要だと考えていた。

もうひとつは、これも2年A組にある。女子中なのでまわりに女子しかないせいとか他人の視線を気にしないということだ。異性がないので気が常に緩みっぱなしになっていて、女性らしさが全くと言っていいほどない。特に近右衛門の孫の木乃香このかは父親の詠春えいしゅんに大和撫子のような女性にしてほしい、と念を押されているので困っているのだった。

なので、この二つの問題を解決する方法を考えていたが、どうしても結論はひとつだった。

「致し方あるまい」

なかば諦めたように受話器を手にして、どこかにかけている近右衛門の姿が学園長室にあったという。春はすぐそこまでやってきている。

女子中のエリアでは、いやでも目立つ五人の男が馬鹿騒ぎをしながら歩いていった。近右衛門が出した結論はこの五人を中等部に編入させることだった。五人とも中学生の平均より背が高い上にこのうちの二人は目つきが悪いため誰一人声をかけられずにいた。そんな状況を見かねて高畑が声をかけてきた。

「こんにちは、君達。元気だったかい？」

「はい、お久しぶりです。これからよろしくお願いします、高畑さん」

先頭を歩いていた男……目つきの悪いうちの一人、高島^{たかしま}が挨拶をした。久々にあったのか笑顔になったので、先ほどの威圧感も幾分か減った。

「事情は聞いているよ。ではついてきてくれ、学園長室に案内するよ。」

「ありがとうございます」

春と一緒にやってきた男達はこれからの未来を予言しているように騒ぎながら、校舎に入っていた。

『第一話 転校生も魔法使い!』

俺は今ひどく後悔している。なぜなら、親しいはずの近右衛門に騙されたからだ。いや、騙されたというよりは自分がちゃんと話を聞かずに二つ返事で了承したせいであろう、だがそんなことはもはや道端にある石のようにどうでもいい。

近右衛門の頼みはこうだ

「わしの学校に転入してほしい」

それを史登^{ふみと}はたいして考えもせず仲の良い奴等と一緒に麻帆良学園にやってきた。着いてから詳しい用件を聞いていくと、麻帆良の中等部は女子中だということがわかり、先ほどからずっと一緒にやってきた章臣^{あきしげ}と涼介^{りょうすけ}からにらまれているのであった。

因みに今は自分達の担任になる予定のネギ・スプリングフィールドにあっていて。10才のわりに大人びて見えるのは、スーツに眼鏡のせいだけじゃなく落ち着いた雰囲気にあるだろう。

「はじめまして、僕はネギ・スプリングフィールドと言います。君達の名前は？」

「俺は高島史登です、ネギ先生」

史登が一礼をして後ろに下がったのと同時に、中でも一番の長身の男が自己紹介を始めた。

「俺の名前は水野守^{みずの まもる}です」

続いて眠そうに瞼をこすっている男が自己紹介をした。

「あぜがみ りょうすけ畔上涼介です」

次に史登に殺意をこめた視線を向けていた男が、ネギのほうに向き直り営業スマイルを作りつつ、自己紹介を始めた。

しかし、目が笑っていないので余計に怖くなつたといえるだろう。というより俺からすると冷や汗がだらだら流れてるんだけど。

「しみず あきしげ清水章臣と申します、以後お見知り下さい」

「は、はい。こちらこそよろしく願います」

おいおいと心の中で突っ込んでみたものの、あの目に睨まれながら微笑んでいるのは無理だろうと、勝手に自己完結する史登であつた。次に先ほどから落ち着きなく手遊びをしたり、体をゆすっている男が自己紹介をした。

「きじま まこと木嶋允です、よろしく願います。」

これだけで終わればいいものを無駄に続けて近右衛門の考えがぶち壊されることになる。

「先生も魔法使いなんですよ。得意な属性はなんですか？」

「えええ！君たち、何でそのことを知ってるんですか。ひょっとして君たちも？」

史登が驚きで固まっていると近右衛門が説明してくれた。

「こんなに早くばれるとは思わなかったのう。まあいいじゃろう。」

ネギ君彼らは関西術師と西洋術師の中でも強い部類にはいつとるんじゃない。ネギ君の良きライバルになればと思い、来てもらったんじゃない」

近右衛門は考えていることを包み隠さず話せてすっきりした表情だが、史登は胃がきりきり痛む思いだ。

しかし、そんな史登の心境を知ってか知らずかネギは友達ができたようにはしゃぎながら史登たちに近寄った。

「もしも困ったことがあったら相談してくださいね、高島くん」

先生が生徒に相談するなよと、思いながらも純粋な笑顔で言われると、いやだとは断れない人のいい史登であった。

『第二話 春の訪れ、嵐の前の静けさ』

2年A組の表札も変わり新規一転、新しい一年が始まる。
新しい一年は騒々しい音と共に始まった。

「3年！」

「A組！」

「ネギ先生——っ」

ドアの外で絶対にこのテンションにはついていけないだろうかと、
肩を落とす史登、涼介、章臣。その後ろでうきうきしている允と守。
守は今まで男子校だったため同い年の女子とは2年間会話をしていないので女に飢えているのだ。

「えと……改めまして3年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの1年間よろしく願います」

「は——い」

「よろしく——」

お嬢様のような女子とさきほども叫んだ、背の低い双子といたって普通の女子が声をそろえた。
ドアの外で本当に寮に帰り始めた章臣を守と允が止めたのを高畑が微笑を浮かべながら見守っていた。

「えーっと皆さんにお知らせがあります」

「なんですかぁー」

「今日、このクラスに転校生がきます」

「先生、男の子？女の子？」

多少アクセントのずれた喋り方の女の子が発言した。

「……亜子、^あうちは女子中だよ」

「そっか、そうやねアキラの言うとおりや」

長身でポニーテールの女の子に返事をするようにネギが答えた

「アキラさん、転校生は男の子ですよ。しかも五人同時に」

「えええ、うつそぁー」

クラスのほとんどの声が重なった

「では、入ってきてください」

ネギの声に反応して、守と允が勢いよくドアを開けて、入っていった。それに続いて史登と猫背二人組みの涼介と章臣が入っていった

「では、自己紹介をしてください」

守はやる気満々で黒板に名前を書いて女子のほうに向き直った。

「うおっ、女子ばっか」

当たり前のことだが男子校だった守には珍しい光景に映っただろう。先ほどのやる気は嘘のように消えていった。

「水野…まも…るです…よろ…しく」

最後のほうは最前列の人にすら聞こえないような声で呟いた。

允は一応、守よりは女子に抵抗があるらしく無難に自己紹介を終えた。

涼介と章臣はたった一言名前を言っただけで終わらした。史登はというと……

「えーっ、高島史登です。いたって普通の男子生徒ですのでよろしく」

と、まとめたのだが涼介と章臣に

「うるせえ、ロリコン、眼鏡属性あり」

と突っ込みをくらってその場に崩れ落ちた

「俺の属性ばらさないでえ」

『第三話 桜通りの魔法使い』

転校生に対する最初の試練である、質問攻めに五人はあっていた。

「どこからきたの？」

「京都です」

「年は？」

「柿崎…私たちと同じに決まってるじゃん」

「あ、そっか馬鹿レッドの明日菜に言われちゃったよ」

「どう言う意味よ」

という具合にただの質問攻めのはずが異様に盛り上がっていた。しかし、質問攻めに終わりを告げるように眼鏡をかけた女性が入ってきた。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3 - Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした。ここですか！？わかりました、しずな先生」

ネギはこちらに向き直り手をバタバタさせながら続けた

「で、では皆さん、身体測定ですので…えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください」

女子達の視線が集まっていることに気がつき、史登達が教室から出て行くのを見てハッとしたように気がついた

「ネギ先生のエッチーーーーッ」

「うわーーーーん。間違えましたー」

廊下にて史登達に

「ネギ先生、普通は人数の少ない俺たちが先じゃないんですか？」

「あ！す、すみません。気がつきませんでした」

本当にこの人は頭が良いのか悪いのかよくわからない人と史登は思ってしまった。

しばらくすると、先ほどのアクセントのずれた子が慌ててこちらに走ってきた

「先生ーーーーっ、大変やーーーーっ。まき絵が…まき絵がーーーー」

「なに！まき絵がどーしたの？」

身体測定中で下着姿の女子が勢いよく飛び出してきた

「わあーーーーー！」

男子一同は驚きの声を上げたが、守と允からは感嘆とも喜びともとれる叫びがあがった。

保健室にはぐっすり眠っているまき絵がいた。

「ど…どうしたんですか、まき絵さん？」

「なにか桜通りで寝てるところを見つかったらしいのよ…」

ネギはしずなの相槌を聞くと何やら難しい顔をして考え込んでしまった。

「なんだ、大したことないじゃん」

「甘酒飲んで、寝てたんじゃないかな？」

「昨日暑かったし、涼んでたら気を失ったとか」

そんな他愛もない話を聞いている間にも難しい顔をしていた

「ネギ…ネギ…ちよつとネギ、なに黙っちゃてるのよ」

「あ、はいはいすみません、明日菜さん。まき絵さんは心配ありません。ただの貧血かと…それと明日菜さん、僕、今日帰りが遅くなりますので、晩御飯いりませんから」

「え…？う、うん」

「ええの？ご飯」

明日菜と木乃香が保健室から出たのを見計らって史登達がネギに声

をかけた

「ネギ先生、魔法の力を感じませんか？」

ネギは納得した顔でうなづいた。

「やはり、そうですね。少しですが魔法の力を感じます。なので今日の夜は付き合ってくださいね」

「はい」

夜桜には一番いい満月の夜、事件は起こる。

『第四話　かわいいひと』

夜空は道端に落ちた10円玉すら簡単に見つかるほどの月の光。噂の桜通りを少女達が歩いていて。

「吸血鬼なんて本当に出るのかな？」

「あんなのデマに決まってるです」

「だよねえ」

少女達は今人気の本のことや、今度の図書館探検はどこまで行こうかという話をした後、ハルナ達はどこかによってから帰るのか、別れを告げて反対方向に歩き出していった

「……本屋ちゃん、一人で大丈夫かな？」

「吸血鬼なんていないゆうたん、明日菜やる？」

納得しない表情のまま明日菜は木乃香と帰路についた

一方、のどかの方は歌でも歌って気を紛らわせようとしているのか、作詞作曲、宮崎のどかの歌を歌っている。

「こ……こわくないー♪……こわくないですーこわくないかもー♪」

段々と怖くなってきたのか歌にも自信がなくなってきた。最終的には風の音

でびっくりするくらいになってしまったのだが。

二度目の風の音は葉が揺れる音ではなく、何か他の物が、風を切る

音が聞こえた。

ふと、空を見上げると街路灯の上に黒衣のローブを身にまとった、金髪の小柄な女性が立っている。

「27番、宮崎のどこか……。悪いけど、少しだけその血を分けてもらうよ」

金髪の女性は不敵に笑うとのどかに向かって跳んだ

「きゃあああああ」

二人の距離が数メートルもなくなった時に、街路灯のほうから走ってくる音が一つ聞こえてきた

「待てーっ」

のどかはその場に突っ伏すように気絶して、倒れてしまった。そこに、杖にまたがって飛んでくるネギと守に涼介。何もなしで飛んでくる史登と章臣。飛ぶことができないのか、全力疾走してくる允の姿があった

「ぼ…僕の生徒に何をするんですかーっ」

ネギは日本やイギリスでは使われていない言語を話しながら、向かってくる

「ラス・テル マ・スキル マギステル 風の精霊11人、縛鎖となりて敵をつかまえろ。魔法の射手・戒めの風矢」

ネギが言い終わると、ほぼ同時にネギの手から何本もの矢が放たれた。

しかし、金髪の女性はそれを一瞥すると小瓶を矢に向けて投げ捨てた。その小瓶が割れるのと同時に、ネギの放った矢は、跳ね返った

「ネギ先生、大丈夫ですか」

允は息も絶え絶え、手を前に出すと先ほどのネギと同じ言語を発した

「魔法の射手、土の一矢」

允の手から出たものは、ネギの手から出たものよりも大きいが速度は、ひどく遅く感じる。金髪の女性は、今度は跳ね返すことなく、ぎりぎりでかわした。

金髪の女性はネギに見覚えがあるのか、話かけてきた。

「驚いたぞ、凄まじい魔力だな」

ネギにも見覚えがあるらしく、声を裏返らせながら返答した

「えっ……、き、君はうちのクラスの…。エ
…エヴァンジェリンさん！」

「ふふ……、新学期に入ったことだし歓迎のご挨拶と行こうか、先生とその仲間達。それにしても10歳にしてこの力……さすがに奴の息子だけはある」

「奴？」

「え！」

三者三様の反応をしているなか

「マジで惚れたぜ」

と、場違いな高島がいたという

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1763c/>

魔法転校生...いろいろ！

2010年10月11日14時31分発行